海外レポート

第37回 国際シーティングシンポジウム 報告

H.C.R.北米担当コーディネーター
トム・ボーチャディング (Tom Borcherding)氏

当初、2021年の夏に予定されていた第37回国際シーティングシンポジウム（The 37th International Seating Symposium／以下、ISS）でしたが、主催者がスケジュール変更を行い、2022年1月31日～2月2日に開催されました。ここでいうシーティングとは、ユーザーの状態に合わせて適切な車いすを選択し、最適な状態に設定・調整するための理論と技術のことです。今回は、オミクロン株の急速な感染拡大のため、シンポジウムは完全にオンラインで行われました。

ISSはH.C.R.とは大きく異なり、小規模なシンポジウムで、対象者を絞り、その目的は教育に重点を置いています。ISSにはユーザーや介護者の参加はほとんどありません（実際の展示ホールがある場合には、展示セッションの1つにユーザーと介護者が無料で利用できるものがあります）。H.C.R.では、展示がメインで来場者はそこを訪れることを目的としますが、ISSのホール展示は二次的な位置づけとなっています。

ISSは、テーマ別に実施される教育トラックに展示を組み合わせています。特にリハビリテーション、すなわち車いすのシーティングとモビリティおよび支援技術の分野に焦点を当てています。

ISSの主な出席者は、理学療法士、作業療法士、リハビリテーション・エンジニア、およびアシスタント・テクノロジー・プラクティショナー（ATP）です。ISSオンライン登録にかかる費用は475米ドルで、すべての教育トラック、展示、およびさまざまな社会的なイベントに参加できます。ISSに参加する臨床医は、ISSが提供する教育トラックに参加するためのCEU（継続教育ユニット）クレジットを受け取ります。

3日間毎日、教育トラックが開催されます。オープニングの基調講演会（すべての出席者が参加）に始まり、さまざまなテーマがカバーされています（別表参照）。休憩時間には、出席者はバーチャル展示を訪問することで、出展者と関わることができます。 2023年2月まで、オンライン登録したすべてのISS参加者は、基調講演、教育トラック、バーチャル展示ホールへのアクセスが可能となります。

今回は展示もオンラインで行われ、出展社はISSの参加者を歓迎するオンライン「ブース」を作りました。出展社は文書や動画のアップロードができ、ブース代表者はチャット機能または1対1でZoomを使用して、訪問者へ製品のデモンストレーションができます。 出展社は、外部のZoomトレーニング・セッションをとりいれ、ISSの参加者に提供することもできます。

2022 年のオンライン ISS の主な統計数値

登録参加者数総数	1,165 名
教育トラック	100 コース
紙ベースでのプレゼンテーション	6 本
出展社	48 社

ISS イベント URL：
https://www.iss.pitt.edu/

なお次回、第38回 国際シーティングシンポジウムは、2023年4月12日から4月15日まで、米国ペンシルベニア州ピッツバーグで開催される予定です（現時点では、リアル開催予定）。

〈別表〉
第37回 ISS　一日目の教育トラック・プログラム（一部のみテーマ概要を紹介）

- ○ パンデミックとイノベーション時代に生まれた新たなニーズとは
- ○ 法律、適用範囲、製品およびイノベーションをすべてうまく働かせるには
- ○ パイロットプロジェクトにおける機能モビリティ評価の実施
- ○ 脊髄損傷者の電動車いす利用におけるアクティブセーフティの推進
- ○ 車いすからの移動トレーニングのオンラインアプローチ検証
- ○ 老年期ユーザーの加齢に伴う変更カスタマイズした車いすの正当性
- ○ 障害者向けパーソナルナビゲーションシステムの導入
- ○ 車いすの交通安全基準
- ○ 車いす部品の異文化での適応について
- ○ 車いす修理業界におけるリハビリテーション技術サプライヤーの意見
- ○ 車いすシートクッションクレームの解読：性能基準とその使用方法
- ○ 小児シーティングとその成長計画上の課題
- ○ 家庭の子どもたちのカスタムシーティングと安全課題
- ○ 学校におけるモビリティの重要性と実践応用

特別連載

第4回 良かったこと調査

公益財団法人 共用品推進機構
専務理事
星川 安之氏

■「良かったこと」を知る調査へ

新たな製品の開発や改良をするには多くの場合、誰がどのように使っているかを**「知ること」**から始めます。1993年に市民団体E&Cプロジェクト（共用品推進機構の前身）は、約300名の視覚障害者に『朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査』を行いました。集まった多くの不便さを報告書にしたところ、たくさんの人に関心を持っていただきました。その結果、一般製品の不便さを改良した共用品が多く市場に出回るようになるとともに、共用品にするための工夫を日本産業規格（JIS）にし、現在までに40種類のJISが作られてきました。

けれども、一般製品全体をみると共用品になっているのは一部にすぎません。一つの要因としては、**「知ること」**である調査が、「不便さ」に焦点をあてていることにあるのではないかと考えました。不便さが明らかになると、その不便さの解決へと繋がりますが、それはマイナスがゼロに戻るということです。ゼロからさらにプラスにするためにと、複数の障害当事者団体と話しあった結果、「不便さ」だけでなく「良かったこと」を調査をすることにしました。2013年度の「旅行に関する良かったこと調査」を契機に、2014年「コンビニエンスストア」、15年「医療機関」、16年「家電製品」、17年「パッケージ」、18年「東京都杉並区」、19年「公共トイレ」、20年「沖縄県」、「岡山県・岡山市」、そして21年からはアジア各国にむけ調査を継続して行っている最中です。

■家電製品にみる不便さの解消例

16年に行った家電製品に関する調査は、特に福祉機器にも参考になるので紹介します。

「あなたが使って良かった家電製品や家事の道具とその理由を記載してください」の問いに、456名から、66種類の家電製品に対して、約6,500件のコメントが寄せられました。多かったのは、テレビ、次いでパソコン、電子レンジ・オーブントースター、電話機・ファックス、温水洗浄便座、洗濯機、冷蔵庫、スマートフォンと続きます。約30年前に行った不便さ調査で多くの人が使いにくいとコメントしていた洗濯機は、6番目に「良かった」のコメントが多い製品に変わっています。いくつかのコメントをご紹介します。

【テレビ】…「音声読み上げ機能が付き、番組表の確認や録画予約ができる」(20代・視覚障害)、「字幕が見れて楽しめる。情報をもらえる」(30代・聴覚障害)、「 取扱い説明書に写真、図があり、文章が少なく分かりやすかった」(20代・発達障害)。

【パソコン】…「字がうまく書けないが、パソコンでは書かなくて済む。(60代・パーキンソン病)」、「使い方がむずかしいが、サポートセンターでのフォローが助かる（60代・高齢者)」

【温水洗浄便座】…「手の痛みがある時、洗浄ボタンがあると助かる。(40代・リウマチ)」、「これがないとトイレに入りたくない（60代・男性)」

【洗濯機】…「点字表示があり、ボタンに触ればわかるので使いやすい（20代・ 視覚障害)」、「 便利で、無かった時代が考えられない（70代)」など。

これらのコメントから、30年前の不便さの多くが解決されていることが分かりました。その解決には、不便さ解消のために作られた日本産業規格(JIS）が役立っています。もう一つの特徴は、個々の工夫が、想定した対象者以外の人からも便利だというコメントがあったことです。例えば視覚に障害のある人を意図して付けられている音声ガイドなどは発達障害、高齢者にも好評です。また、人的応対へも「テレビの操作がわからずメーカーに電話で問い合わせた際、視覚障害と伝えたところ、見えなくてもできる方法で説明してくれた（30代)」、「操作方法を言葉ではなく、実際にやって見せてくれたのは分かりやすかった（50代・聴覚障害)」などがあり、そうした応対の重要さが欠かせないことが分かります。

この調査は、家電製品を中心に聞いていますが、回答の多くは福祉機器にも当てはまることがたくさんあります。当機構のホームページでぜひご確認いただけたらと思います。